

2021年4月26日発行
日本山岳会 緑爽会
発行人 富澤克禮



～～《報告》～～

代表 富澤 克禮

皆様と、以前のようにクラブライフを楽しめることを強く念じまして、総会のご報告とさせていただきます。本年度もよろしくお願い申し上げます。

近況報告（皆様から寄せられた近況をまとめました）

- 田邊 壽 健康は至って良好。時々山をスケッチに出かけています。皆様に宜しく。
- 芳賀 孝郎 今シーズンのスキーはコロナの関係で毎年のニセコ五色温泉でのスキーの集いが中止になりました。幸運にも私は山仲間に誘われて手稲山、札幌国際、キロロの3回のスキーを楽しみ、終了しました。山登りも続けていますが歩行速度が昨年から急に遅くなりました。仲間に迷惑を掛けたくないよう心掛けています。老人仲間即ち80歳以上の人たちに声を掛け、ゆっくりと山を眺め、自然との対話を楽しむ登山をしたいです。山スキーは、転倒すると一人で起き上がることが出来なくなりました。情けなく淋しい限りです。これが老人のスキーであると、最近ようやく自覚するようになりました。我が家の庭の雪が融けて、芝生が顔を出しました。枯葉の取り除き作業をします。福寿草が咲き、クリスマスローズも元気な姿で現れました。忙しい庭仕事の季節になりました。老人は体力に合わせてスローモーションで作業するのが楽しい。5月には、何を植えようかと、家庭菜園のことを考えながらの行動は老人の仕事です。
- 山本 良子 ご案内ありがとうございます。ほんとに残念ですがやむをえませんですね。議案1号～4号承認致しました。会報発行をはじめ新しい係に加わってくださった方を加え新年度体制よろしくお願い申し上げます。会員数も安定し事業計画も実行出来ること願っています。落ち着いてゆっくり集まれる日を楽しみにして今暫く待機しております。
- 田村佐喜子 御無沙汰致しております。幸いコロナ禍にも無事で元気にしております。今日この頃の松本は、桜も終り、残雪のアルプスの山々が、藍色の空に美しく輝いて見えております。時々、城山や光城山に登って眺めています。
- 五十嶋一晃 昨年、拙著『類例のない伊藤孝一の登山』の出版につきまして、緑爽会会員の皆様に大変ご支援を賜り誠にありがとうございました。現在、『薬師岳・奥黒部の博文』（仮題）と題しまして、私の弟を描いた本を出版する予定でおります。内容は、伝記や自分史とはやや異なった「人間学」に近いものを考えており、半分くらいはまとまりました。
- 梨羽 時春 相変わらず腰痛で外出不可です。目、耳、口が不自由でお手上げです。
- 松本 恒廣 古道調査そのものには私も大いに興味があるのですが、残念です。もう少し若ければね。新年度の計画いいですね。コロナに邪魔されないことを祈願するばかりです。
- 福田 光子 雪が多かった今年の冬でしたが、3月の記録的な暖かさで、あつという間に花の季節、桜前線は駆け足で北上し、当地は今、満開です。里から眺める鳥海山の残雪は、昔のゴールデンウィークの頃のように少なくなっております。あまりに早い雪解けに池塘の乾燥化や高山のお花畑が心配になります。山も東京も随分遠くなったこの一年でした。安心して往來が出来る日が早いことを願うばかりです。
- 近藤 裕 コロナ禍のせいで、全ての団体が総会は書面決議（郵送）となりました。緊急事態宣言が解除されてから、ごく一部の団体の役員会が席をあけて開かれました。
- 近藤 緑 コロナウイルスの為に施設にいる夫（近藤信行）とは面会謝絶、ルームの閉鎖で皆様ともお会い出来ず、外出自粛で人影まばらな朝一番に買い物に出る以外は淋しい生活をしております。それでも、介護サービスに週3回（リハビリ&入浴）欠かさず通っているのはひとえに人恋しさからですが、それとて会話出来るような人は、感染を恐れて休みがち、家で看られない重症者ばかり。せめて本でも読もうかと、開放された

近くの図書館へ行ってみると書棚に並んでいるのは、知らない名前の作家達で、ここでも時代にとり遺された悲哀に沈みます。そんな一冊を読んでは「うまいなア」と感心します。文藝も時代と共に進化しているのですね。

関塚 貞亨 3月下旬に96歳になり、老化は一層進んでいます。ひとり暮らしも15年目に入り、新居1DKの暮らしも半年が過ぎました。殆ど家にこもりっきりで近所のスーパーに週に1〜2回行くのと、横浜駅西口に月1回ほど行くほかは、人とも殆ど交流はなく、毎日を無為に過ごして居ります。

吉田 理一 昨年度に引き続き新潟県立塩沢商工高等学校に講師として勤務しています。

里見 清子 今年は春の花々の開花が早く、ピンク色に、淡い緑の山々と菜の花が色を添え、甲府盆地一帯は明るい雰囲気包まれ、2019年までは4月初めに信玄公祭りで賑っていましたが、今年も延期とか？ 特に今年は武田信玄公生誕500年の節目でもあり残念です。実は、3月24日（水）に弟妹と共に名古屋城二の丸広場に置かれた金鯱展を観てきました。16年ぶりに地上に降ろされ綺麗に磨かれた金鯱。砂山（山の形の白い台）で光り輝く雄の金鯱、水盤に優雅に浮かぶ雌の金鯱。好天に恵まれた暖かい日差しの中、大勢の観客は指導員の指示に従い鑑賞出来ました。順番を待つ間に眺めた鯱が降ろされた名古屋城。（場内は密にならないよう人数制限あり。日帰りの旅はあきらめました）

渡部 温子 年間の集会・山行計画等、早速カレンダーに記入。それでも忘れがちなこの頃。会員も増えて、事務局の幹事に若手の女性が入りまたまた楽しみです。

4月1日八重山に行ってきました。足元に咲いている草色の春蘭が見頃でした。6月の計画、楽しみにしています。緑爽会の前回の計画で歩かれた方々は参加して、きっとビックリすると思います、道は整備され歩きやすくなっていました。

高辻 謙輔 今春は庭のブナが久しぶりに開花しました。梢を見上げて外出自粛の無聊を慰めております。

南川 金一 体調の関係で山へ行けない日が続いており、なんとも無念なことです。

平野 紀子 いつも会報楽しく拝見しています。皆さまのお力のお蔭です。ここは1000米の標高でカモシカ、鹿が飛び跳ねています。この冬はゲレンデスキーを3回しました。桜は未だですが、水仙が咲きました。

鳥橋 祥子 コロナ・コロナの1年でした。毎日の散歩で足が弱るのを防ごうとしておりますが効果はわかりません。はやくワクチン接種が終わり自由に外出できる日を楽しみにしております。あたり前の日常生活の大切さが身にしみました。

中條 昌子 いつもお世話いただきありがとうございます。昨年3月4日、身近にコロナが発生し、それ以来これ以上自粛出来ない生活を今も続けています。

大島 洋子 晴れた日には散歩です。先日は東山公園の御衣黄が満開でした。

島田 稔 間もなく数えて90歳。歩くペースがすっかり遅くなり、3月で高尾山のサポートレンジャー会を退会いたしました。何とか歩くことだけは続けたいと思っております。緑爽会の行事には是非参加いたしたく、今後ともよろしく願いいたします。

小清水敏昌 コロナ禍のため、いままでの生活パターンが異なってきて何となくボケーっと生活している感じがしております。チョコちゃんに叱られる？ 最近では、感染が減少するどころか、変異型のコロナが出現し余計出かける気力がなくなりましたね。ウイルスも

生き延びるため変化しているのだから、with CORONA でお互いそっと生きて行きましょう。でも人間の場合は、自分の体力の維持に努めなければならない、小生はその一つとして近くの井の頭公園の散歩程度は、出来る限りするようにしています。コロナ禍で行政もマスコミも飲み屋の救済ばかり言っているが、感染予防をキチンとやらない連中に対して、もっと徹底した予防教育をしてほしいものだと思いますね。

辻橋 明子 コロナ禍の中、まる一年日常生活が 180 度変わった生活環境でしたが、その中で、うつさず、罹らずのルールはしっかり守りつつ、じっと閉じこもる事はせず、体調維持に努めました。お陰様で周りの、膝が痛い、腰が痛い、気分が憂鬱という声の多い中、日々それなりに、楽しく過ごしています。唯一残念なのは、大好きな食べ歩きであちこち出かけていた友人達が、なかなか付き合ってくれなくなったことです。

間瀬 泉 この二年近く、遠出はできないものの、恒例の春の低山歩きはしました。いつまで続けられることやら・・・。

富澤 克禮 昨年の 3 月頃から、ご存知のとりの新型コロナ禍です、そんな中 5 月に行われた書類審査による東京多摩支部の支部総会では、「準会員も支部長以外の役員になれる」という支部規約の改正（改悪？）が行われ、準会員が役員になりました。反対しましたが、力及ばずわずか 5 票差で可決されました。私にとっては、日本山岳会のあり方、東京多摩支部のあり方を考えさせられる大きな出来事でした。

最近、ストレス解消と体力維持の為に、専ら、高尾山を歩いています。三密を避けるため車でいきます。日々、変化する植物等の様子を見るのは楽しいです。

11 月の白内障手術の経過もようやく安定してきましたが、今度は耳です、体温計のピーピーの音が聞こえなくなりました。

夏原 寿一 私の“ジム”は以前、近所の 7 階建てのイオンにある 200 段あまりの階段でしたが、階段上りは膝に痛みを感じることもある上に、階段は屋内なので最近に行くのをやめました。代わりに行っているのは、我家から歩いて 15 分ほどのところにある神社。そこには 30 段の石段があつて、その隣にかなり急な坂道があります。その坂道をゆっくり駆け上がり、ゆっくり歩いて下りてくる、これを繰り返しています。

渡邊 貞信 緑爽会幹事になってから早 4 年目に入り、日頃、皆様には大変お世話になっています。
・陶芸は土選びから菊練り、ロクロ挽き、素焼き、釉掛け、本焼きまで一貫して全ての行程を体験出来る魅力にはまり既に 8 年を過ぎ、創作の魅力に取りつかれて生きがいの一つになっています。

・クラシック音楽。コロナ禍の影響をまともに受けて NHK 定期演奏会も再開の目途もたたず 60 年間聴き続けている生の音楽に疎遠にならざるを得ないことはさびしい限り。せめてもの慰めは陶芸の作陶作業時にクラシックを BGM にして好きなブルックナー等の音楽を楽しんでいます。

石塚 嘉一 昨年は、新型コロナ感染拡大で、電車に乗るのもほとんどやめて、月 2 回程度の独りでの低山歩きも、グループの山行も、ほとんど中止しました。その分を取り返そうと、年頭に野心的な計画を立てただけけれど、コロナ下で、今年も小屋泊まりの縦走はできるかわからないし、良い機会ととらえて、奥多摩や秩父の気になる山を歩き直して、また甲州や信州、越後まで心配なく出かけられるようになるのを待つことにしようと思って、非常事態宣言解除後から、近場の山を歩き始めました。緑爽会の皆さんによ

い報告ができるといいなと思っています。

中村好至恵 総会のお知らせ、ありがとうございます。また日頃より、緑爽会では大変お世話になっております。今年度の活動のなかに秋の絵画鑑賞とロッジ山旅泊山行の計画を入れていただき、感謝しております。このような状況下、果たして八ヶ岳南麓での個展が予定通り開催できるのか？不安材料が多いのですが、前向きに準備し、会員の皆さまをお迎えできたら大変うれしいことと思っております。実務は荒井さんに何もかもお任せとなりますが、お手伝いしつつ微力ながら緑爽会の活動に加わりたいと思っております。どうぞよろしくお願い致します。

有岡 純子 会の活動が自粛しているため、個人的に近郊の低山に月1、2回くらい出かけています。4月は益子の雨巻山に行きました。沢沿いや尾根の変化に富んだコースを満喫してきました。地元の会の方が登山道を整備していて、とても歩きやすいです。山頂にはテーブルとベンチがあって、景色を眺めてのんびりランチしました。私のお気に入りの山となりました。また違う季節に再訪したいと思います。

松川 征夫 相変わらず新型コロナウイルス感染で作業を実施するか？中止にするか？会員も分断されて賛否あり困っています。無理する必要はないと思うのですが・・・・？

荒井 正人 左足首に加えて右膝にも痛みがあり、まともな山登りは出来ません。ただ行きたい山やルートは際限なくあり、このギャップをどう埋めるかが当面の課題です。

横関 邦子 2020年12月より事務局に加わらせて頂きましたが、まだ十分な働きができず、申し訳ない次第でございます。最近の世の中の流れの中に男女平等がありますが、この流れを受けて、藤下さんと頑張りたいと思っています。山へは行きたいと思いつつ、コロナと仕事でなかなか思うように動けません。

皆様とご一緒できる環境、状況になることを強く願っています。

藤下美穂子 今年はせつせと歩き都内の桜を楽しみました。桜の下ではマスクの顔でも皆顔がほころんでいます。マスクが早くとれますよう願っています。今年度から会計のお手伝いをする事になりました。どうぞよろしくお願い致します。

小原 茂延 最近思うこと&新しい取り組み。巡り来た春爛漫の自然界とは裏腹な人間社会は山友と会話を交わす場も少なくなり、単独で山を味わっていた世界に戻っています。コロナ云々でなく、いずれは委員会や同好会を辞するので、山を広範に愉しむ自分の山世界再構築にシフトしています。所属している委員会も世代交替の推進を提言して、運営よりも専ら登山文化の伝承を引き継いでいます。古い会報によれば委員の任期もかつては概ね4年だったと知り、数十年在籍ともなると功罪あるようです。今年に入り、山岳古道の支部プロジェクトチームから声掛けがあり、奥武蔵・比企・秩父などの古道の文献調査、推薦コース提案などの活動を愉しんでいます。登山コースと一味違った歴史とロマンを味わえるのが魅力です。

小林 敏博 コロナ禍で昨年度は緑爽会の会合・山行の中止や延期が続きました。残念でしたが、コロナがやや収まった10月24日に開催した25周年記念講演会と11月12日の会山行「笹尾根」で久しぶりにお元気な皆さんにお会いできよかったです。今も自粛で個人山行を減らして少しおとなしくしています。ワクチン接種が普及し、コロナが収束して、例会等で皆さんにまたお会いできるのを願っております。

新入会の相良泰子さんです。

相良 泰子 はじめまして。相良泰子と申します。緑爽会に入れていただきました。よろしくお願いいたします。

古道調査の現状（情報提供）

日本山岳会創立120周年記念事業としての「日本の山岳古道120選」ですが、会員の近藤雅幸さん、石井秀典さん、小林敏博さんの3人が本部のPTメンバーとなっています（近藤さんはPTリーダー）。こうした状況の中で、会としてのマンパワーを考慮すると、十分な推薦活動及び調査活動をするのは難しいと判断され、緑爽会としての活動は行わないこととしました。ただ、本部及び所属する支部の活動に協力することや、個人として推薦活動や調査活動に加わることは大いに奨励します。実際の調査などは出来ないが興味がある、あるいは各支部の取り組みがどんな状況にあるのか知りたい、という会員も多いことと思います。そこで緑爽会会員の所属する支部の取り組み状況を簡単に報告していくことといたしました。

既に本部への提案は3月末で締め切れ、その段階で206の推薦があったとのこと。この中から120の古道が選ばれて、文献調査や実踏調査が行われることになります（4月の理事会では、その後の推薦もあり県別延べ数317、古道数219とのこと）。会報「山」でも逐次紹介されていくものと思いますが、以下わかる範囲で簡単にお知らせします。

東京多摩支部 緑爽会の石井秀典さんが支部のプロジェクトリーダーとなり、すでに本部に3つの古道を提案済。「鎌倉街道山の道」「日原往還と富士信仰の道」「浅間尾根交易の道と古甲州街道」石塚嘉一さんも支部のPTメンバーで浅間尾根を担当されます。提出後、個人で推薦したもの5コースも本部から認められ、かつ浅間尾根は2つに分けられたとのこと、9つの古道を調査することになっているとのこと。

新潟支部 広い新潟を5つの地域（上越・中越・下越・佐渡・会津）に分け、各地域のリーダーを中心に候補選びを行い、既に支部として5つの候補を本部へ提案済。緑爽会の吉田理一さんは中越のリーダー。中越は八十里越を本部へ提案。吉田さん推薦の枝折峠は個人調査対象となりました。14ページに関連記事がありますのでご一読下さい。

群馬支部 「沼田・会津古道」を本部に推薦したということで、7月には実踏調査開始とのこと。他にも推薦している古道があると思いますが、これは平野紀子さんからの情報です。

埼玉支部 「十文字峠越え」「秩父往還（雁坂峠越え）」「三峰神社参道」「鎌倉古道上道」など6コースを本部に推薦しています。小原さんも活動に関わっています。

個人としての推薦

中村好至恵さんが、「西山を守る会」の事務局長と相談の上で、2つの推薦を行っています。

「八菅修験の行者道」と、相州アルプスと名付けた宮ヶ瀬湖から南北に連なる峰々を東西に横切る生活道「半原越・宮ヶ瀬越・荻野越」です。

今後、他の支部の状況もお知らせしていくことといたします。

古道には峠越えも多く、一つの支部では完結しないケースがあります。そういった古道調査での、連携情報なども会員からお聞きして、報告していきたいと考えています。

特集「新入会員の声」

昨秋以降、新しく5人の入会がありました。コロナで活動が出来ず、交流の場も持てないことから、今号では新入会員の皆さんから自己紹介を書いていただきました。親睦の場に優るものはありませんが、お互いの距離を縮めることが出来れば嬉しく思います。(掲載は会員番号順)

山は私の宝物

近藤 裕

小学校の頃は大阪在住で、生駒山・信貴山、中学時代は疎開先山陰鳥取県の船上山・大山、18歳で就職して東北仙台で栗駒山と、少年時代から山には縁がありました。

上京して東京国税局勤務となり、夜間に通った中央大学の体育の単位で信州戸隠山、都立大学の体育の単位で北アルプスの槍・穂高・蝶ヶ岳に登って、すっかり山のとりこになりました。

奥山章氏や芳野満彦氏等が創設された第二次 RCC の登山教室で、いろいろな登山の基礎を教わりました。その頃は、明けても暮れても山登りで、多摩の山々を始め八ヶ岳・谷川岳・丹沢山塊・奥秩父・南アルプス・中央アルプス・北アルプスと片っ端から登りました。



東京国税局の同僚が、苗場山単独行で遭難したのを救出する捜索隊に参加した 近影のを契機に、東京国税局山岳部に入会しました。日本山岳会に入りたいと思いましたが、その頃は、日本山岳会は敷居が高く、大学山岳部のリーダーでないと入れないと言われていました。40歳を過ぎた頃、縁あって、林和夫氏と織内信彦氏のお二人の推薦で、日本山岳会に入会させていただきました。

27歳の秋に結婚して、30歳過ぎには二人の子供にも恵まれていたので、家族で登山をしようと思い、奥多摩に近い国分寺に居を構えました。ただ、子供が出来てから、その安らかな寝顔を見ると、父親としてはあまり危険な登山はしない方がいいと思いました。それ以後は、冬山や岩壁登攀はせず、専ら尾根歩き専門となりました。

38歳で独立し、税理士事務所を立ち上げましたが、その間もその後も、夫婦と子供二人との四人で、また奥多摩から始めて、次々とアルプスまで登りました。五竜岳の尾根で突風にあおられて、子供が吹き飛ばされそうになって、肝を冷やしたこともありました。

60歳頃は、税理士会やロータリー・クラブのおつきあいで、山登りよりもゴルフをすることが多くなりました。それでも、70歳ぐらいまでは、家族四人で登っていました。

しかし、80歳になると、脚がめっきり弱くなり、登山は無理となったので、最近、山の歌を唄う会や、吉祥寺・八王子・聖蹟桜ヶ丘のサロンに熱心に通っています。

今、振り返ってみると、長い人生の中で、山のことは私の大きな部分を占める宝物だと思います。

私はまもなく91歳を迎えます。毎日体操とウォーキングをしています。病気もしないで元気にいられるのは、若い頃からずっと山歩きを続けてきたのがよかったのではないかとと思っています。

最後に、今年秋に還暦を迎える長男が、一昨年に深田久弥氏の日本百名山登山を達成したことが大きな喜びとなりました。

入会しての思い

辻橋 明子

皆様 初めまして。昨年11月に入会させて頂きました 辻橋 明子と申します。

入会の動機は、緑爽会主催の講演会のお手伝いをした時、皆様のチームワークの良さに触れたことでした。一つの出来事に意思の疎通の豊かさを感じました。

私は日本橋茅場町で生をうけましたが、2歳の時に福島県いわき市に疎開、小学校3年生までそこで育ちました。遊び場が裏山でしたので、自然の中で身体に染み付いた感性が、30歳で始めた山登りの中で、身体で感じる自然との触れ合いの心地よさとなって増幅されました。

1956年 日本人がマナスルに初登頂した時の話は、子供心に父から新聞を見ながら聞かされ、初めてシェルパという言葉やネパールという国のあることを知って関心が湧き、「登山」という自然との関わり合い方のひとつが記憶の奥にとどまっていました。

30歳を迎えた時、何か新しい事に挑戦をしてみようと思い立ち、始めたのが登山でした。その頃、山と溪谷社が登山教室を開いていて、講師としてエーデルワイスクラブ(EWK)の会長だった、坂倉登喜子さんがきていました。登山教室を終了したあと、早速クラブへ入会させていただきました。このクラブはハードな山登りはせず、山歩きを文化の一つと捉え、花や植物、生き物、歴史、風や雨、あらゆる自然界との感触を楽しみ、感動を共有する事で登山を楽しんでいました。

1996年、山岳会への入会を機に20数年在籍していた EWK は退会しましたが、在籍中の思い出として一番大きいのは、毎年上高地で開催される「ウェストン祭」に島々の谷から徳本峠を越えて参加していたことでしょうか？ 20回以上になります。毎年同じ時期なのに、その都度違う顔を見せてくれて、新しい感動があったり、同じ場所で毎回出会う花々との再会など、思い出はつきません。

山へ登る楽しみは人それぞれに多様です。よりハードな世界への挑戦、ピークハント、百名山、写真、花や樹木の探索、バードウォッチング、様々に。



11月の会山行浅間峠にて

私が山登りの中で一番求めるものは自然との「一体感」なのです。半世紀近く山へ行きながらまだ3～4回しか体感していない感覚ですが、本当に不思議な感覚なのです。多分同じような感覚を感じたことがある方はいると思うのですが？

仲間とわいわいしながら登っている時には無理ですが、一人夜明け前の消えかける星を見ながら歩き、ふと腰掛けた一塊の岩石と同化したり、苔むした樹林の大木を見上げている時、自分も一本の樹木になったように感じたり。強風を避けて壁の凹みに身を寄せた時、身体が壁に吸い込まれて磨崖仏になってしまったり、本当に自分がそこに「居る」のではなくて「ある」？ 言葉では言い表せない感覚なのです。自分が自然の一部分になった様な感じ、とても気持ち良い感覚です。

また、こんな気分になることもありました。

秘湯の露天風呂に夜中一人で入った時、ちょうど満月でした。月を見ていたら、狼のように遠吠えをしたくなりました。あるいは、動物の足跡ひとつない銀世界の野原を見た時、四つん這いになって転げ回りたくなったりします。

これらの感覚は単に幼児化してしまうということではない何かが身のうちにあるのではないのでしょうか？ 私が山や自然が好きなのは、その何かに動かされているのかもしれませんが。

歳と共に感性は衰えます。

これからも山へ行った時、この何かに身体が反応してくれることを期待したいのです。

緑爽会に入会して

竹中 彰

この度、富澤代表ほかの方からのお勧めで当会へ入会した竹中です。宜しくお願い致します。所属は東京多摩支部です。JAC 入会は1999年4月で、会歴としては入会后監事として数年間、山本健一郎、内田博、深川安明の各氏と共に務めました。

監事退任後は2010年の東京多摩支部発足時に支部長に選任されて野口いづみ現支部長に引き継ぐまで9年間務め（この間は富澤さんに総務委員長として大変お世話になりました）、現在は同支部監事です。

緑爽会名簿を拝見しますと、支部長時代にお世話になった20名を超える方々や、北大山岳部OBと共に大倉山ジャンプ場近くのご自宅に夜襲をかけてご迷惑をお掛けした芳賀さんなどなど存じ上げのメンバーも多く心強くしております。

登山は高校時代からスタートし、一橋大山岳部を卒業しましたが、活動領域は専らドメスティックで現在はOB会の針葉樹会会員として時々昔の仲間と近郊の山歩きを楽しんでいます。



岳沢にて

スキーは札幌在住のOBの企画に乗って東北の松野ドクターや金沢の森ドクターなどのメンバーとニセコ周辺のバックカントリーなどを楽しんでいましたが、最近は完全にグレンデ派で支部の同好会や立教大OBの今村さんの仲間に加えて頂き鹿島槍山荘でほぼ毎年お世話になる程度です。しかし、昨年来のコロナ禍でこれも休眠状態に陥っています。

最近の山行実績は自粛要請等でスッカリ減りましたが、昨年の山行メモを見るとコロナの間隙を縫って1月多摩支部登山教室付き添いの三ツ峠山、3月同修了登山の本仁田山、6月天神尾根から塔ノ岳（尊仏山荘泊）、9月一の鳥居から蓼科山（山頂ヒュッテ泊）、10月再び塔ノ岳（尊仏山荘泊）で夕方のダイヤモンド富士を観察、同じ10月に石塚さんのお誘いで支部「低山を楽しむ会」の馬頭刈山程度に留まっています。

居住地（町田）の関係から奥多摩駅までの時間距離が遠く、横浜線で一駅の町田駅から小田急線利用が利便性高いこと、また同行する針葉樹会の仲間の多くが神奈川県在住であることから丹沢方面が馴染みとなっています。

とりわけ、以前から丹沢の中でも塔ノ岳の尊仏山荘がベース的な存在になり、小屋主花立さんの好意で家庭用卓上コンロを寄託し、ガスボンベ、食材、コッヘル等を持参して3、4名で鍋を囲むことも楽しみの一つです。登路は大倉からの単調なバカ尾根を敬遠し、その都度変更してここ数年は小丸尾根、烏尾山の仲尾根から表尾根、花立山荘上部に出る源次郎尾根、菩提峠から日本武尊足跡経由で三ノ塔から表尾根など極力目先の変化を求めています。ただ下山ルートは大倉バス停前の

ソバ屋「さか間」を目的にバカ尾根を下ることが多く、直近では久しぶりに鍋割山から栗ノ木洞、櫟山を経て^{やどりき}寄に下山し、新松田に出ています。栗ノ木洞の急登や寄までの所要時間の長さに、こんなだったかと息を切らせました。

また、2019年の1月に檜洞丸まで主脈縦走の際に、尊仏と次の蛭ヶ岳山荘と2夜続けてウィーン・ヨハン・シュトラウス管弦楽団メンバー2名（オーボエとチェロ奏者、演奏旅行の合間の休みに登山）と同宿したことも珍しい体験でした。

先日の寄への山行と言い、この所の山行時の体力不足を感じる状況では、特にコロナ禍でトレーニングも不足しており、無理は出来ないなと痛感するこの頃です。

待ちこがれた緑爽会

有岡 純子

JACに入会したきっかけは、2012年11月にユースクラブのイベントで、日本山岳会×Hitsuji Project「FULBARI Trip」に参加したことです。御岳山の宿坊に泊まるイベントを会員外向けにも開催されていて、そのとき、当時WV部の永田弘太郎さん（現常務理事、MCC代表）が1日目のみ参加されておられ、「来月も宿坊泊の山登山があるのでぜひ！」というので七面山に参加しました。それからWV部の月例登山に参加するようになり、2013年に入会に至りました。

それまでは、ノースフェイスやアルパインツアーなどのツアー登山に参加していましたが、もっと自分に合う仲間と知り合って自分たちで計画して自由に山に行きたいと思っていました。

JACに入会してからは、ユースクラブのWV部（現在は退部しました）、MCC（マウンテンカルチャークラブ）、平日クラブ、図書委員会で活動しております。せっかく歴史のある会に入会したので、ユースクラブ発の活動だけではもったいないと考え、MCCの仲間も多い緑爽会の評判を聞いてぜひ入りたいと思っていました。

コロナウイルスの流行によりなかなか入会する機会がありませんでしたが、先日、鳥橋祥子さんと高尾山に行った際に、行きのバスで偶然、代表の富澤克禮さんにお会いして山歩きをご一緒させていただき、やっと入会することができました。

人があまりいないマイナーな山をのんびり歩くのが好きです。最近は埼玉や北関東の低山によく行きます。下山後の温泉と一杯は欠かせません。

山以外では、街歩きも好きです。古い建物を見るとワクワクします。古いお屋敷が公開されているのもよく見に行きます。山行の際は山登山だけでなく、山麓の街もぶらぶら歩きたいと思っています。現在の仕事は平日休みがありますので、平日の山行には行きやすいです。文章を書くのは苦手ですので、今度お会いした時に詳しいお話をさせていただければと思います。皆さまにお会いできるのを楽しみにしております。



南高尾山稜にて

山や森林で爽やかな汗を

松川 征夫

私はむかし東京都のチベットと言われていた五日市で育ちました。

夏休みは清流秋川で朝から夕方まで、魚とりや水泳で遊んで毎年日焼けで足や腕、顔の皮がむけ、お陰様で三枚目になりました？ 友達と孟宗竹で小屋を作り泊まったことなども楽しい思い出です。現代の子供は皮膚がむけるほど炎天下で遊んでいるのでしょうか？ 自然は勉強の場と思います。小さい頃は風呂やご飯を炊くのは薪でした。学校が休みの時は山へ薪拾いにいやいやながら働かされたこともあり、山の魅力など少しもありませんでした。ただキャンプの時など、薪でご飯を炊くのに自信ができたのもそのような過去の経験でした。

現役時代は全国を転々とししました。妻は登山が好きで誘われたのが始めたきっかけでした。北海道大雪山では特にナナカマドで彩られた赤岳の見事さは臉に焼き付いています。富良野岳ではナキウサギと遭遇、大雪高原沼温泉ではヒグマの大きな足跡、糞、唸り声に怯えたことは忘れません。

四国の石鎚山ではクサリ場で足がつり困ったこと。雄大な白山、など山の素晴らしさを教えていただきました。

現在は日本山岳会「高尾の森づくりの会」で活動を行っています。会員数は約170名です。御多分に漏れず年々高齢化してきており70代が主流となっています。お陰様で今年創立20周年を迎えることが出来ました。いままで続けてこられたのも、国、東京都などの監督官庁のご指導の元、法人会員、個人会員の皆さんのお陰と感謝しています。20年も経ちますとベースからだんだん離れた作業現場となりますので、遠くまでは無理なメンバーが増えてきたのも仕方がない事です。

活動から感じることは、森林で汗を流すことは健康に良いということです。それは静か、浄化、臭い、樹々から発する精気などまさに森林浴です。多少体調が悪くても汗を流すと帰りにはピシッとする。登山とも共通することと思います。

緑爽会への入会は最近ですが、石塚さんから誘われたのがきっかけです。活発な活動内容、素晴らしいメンバーなど伺いそれではということで入会させていただきました。

話は変わりますが、盲導犬協会のラブラドルレトリバー「ワンダー」を協会から預かり一緒に過ごしています。生後2ヶ月で預かるパピーウォーカーを経験後、1歳で協会に戻し盲導犬への訓練が始まります。結果は「繁殖犬」という役割になり、3歳、4歳、5歳時の3回子供を産みました。合わせて27匹（9匹/1回）産み引退犬となり現在も一緒に生活しています。子供たちも盲導犬や様々な役割で頑張っています。ワンダーは現在15歳。人と同じで後足が弱くなり歩くのがやっとという状態ですが懸命に頑張っています。当たり前ですが最後まで面倒を見ていきたいと思っています。

緑爽会の「爽」はまさにさわやかであります。山、森林で心地よい汗を流していこうと思っています。よろしく願いいたします。



小下沢林道整備で

編集者余話〈その1〉

南川 金一

本紙前号で夏原さんが会報編集者に苦言を呈していた。その思いはよく分かつるとともに、私自身編集者として、何回もミスをやってきたから、編集者のつらい思いもよく分かる。それだけに、ともすれば編集者に同情的になって、苦情を言うべきにも関わらず、言わずに済ませてきた。夏原さんの思いを読んで、そのような対処がかえってまずかったのかなと、いまになって思う。拙著『続山頂渉獵』が会報に紹介された(No.849)のだが、サブタイトルが落ちており、さらには見出し(書名)と本文が離れ離れになっていた。それも、見出しと本文が別のページに離れているのである。

「泣き別れ」といって、編集の初歩のミスである。しかし、タダ働きの不慣れな編集者に苦情をぶつけるのはいかなものかと、ためらった。拙著の紹介文を書ってくれたロジ山旅の長沢さんが苦情を申し入れたところ、メールでお詫びが来たというが、私には何も来なかったし、訂正も載らなかった。長沢さんの苦情の先が、編集の責任者だったのか、編集者その人だったのかは知らないが、「著者が文句を言って来ないのは、ミスに気付いていないのだから、とぼけて放っておけばよい」と考えたのだとすれば、かなり質^{たち}が悪い。それでは会員の会への信頼は崩れてしまう。夏原さんの不信感もそのあたりにあるように思えた。『山岳』や『日本山岳会百年史』の編集に係わり、その間には側面からながら会報編集者の苦労も見てきたので、山岳会の機関誌・紙の編集について感じることは少なからずある。

いやいや『山岳』の編集者に

私の山岳会入会にあたっての紹介者は織内信彦・望月達夫両氏(いずれも副会長、名誉会員)である。入会して数年たった3月のころ、織内さんから「ちょっと話がある」との電話があった。その夜の会での集まりの後、市ヶ谷駅近くのルノアールへ行った。「今年は役員改選があるので、次の『山岳』のエディターをやってもらいたい」という。「アルパインクラブでは、エディターは特別な位置付けをされていて名誉な役割だ」という言い方がいかにも織内さんらしい。その頃の私は2500m以上の山を登り終え、2400m級に挑戦していた。さらにはその先では2000m以上をと考えていたから、山へ行く時間を割かれるのが困る。「編集を手伝うくらいなら引き受けてもよいが、編集責任者や理事というのは荷が重い。何よりも山へ行けなくなるのが困る」と断ったのはいうまでもない。しかし、「明日の理事会・評議員会に役員候補者名簿を提出しなければならないので時間がない。すぐに了承してほしい」と。話をしているうちに、仕掛人は松田雄一氏(後に名誉会員)だと分かった。「将を射んとするには先ず馬を射よ」というが、将でもない小者を射るのに馬を射てくるとは、松田さんも人物が小さいではないかと思っただが、そんなことを口にする柄ではなかった。松田さんは次期副会長で、山田二郎会長を補佐して“組閣”に奔走していたのである。

翌朝、勤務先に望月さんから電話があり、「僕が『山岳』の編集をやっている時にも、山には結構行ったよ」という。「山へ行けなくなることを理由に、渋っている」との話が望月さんに行き、それを受けての電話であった。私から見れば、そうとも思えなかったが、勤務先なのでそんなことを議論している訳にはいかない。「山へ行く回数が少なくなるのには同情するが、ぜひ引き受けてもらいたい」というのが望月さんの本意だと分かれば、それ以上抵抗する訳にはいかなかった。

後に分かったことであるが、大学山岳部OBが山岳会の役員になって、会の運営に当たるという暗黙の了解がある。役員改選の年になると、次期役員の顔ぶれを考えなければならない。旧知や後

輩の大学山岳部 OB で埋めていくのであるが、困るのが『山岳』と会報の編集である。大学山岳部 OB に編集経験者がいればよいが、いなければそれ以外から探さなければならない。出版社・マスコミに在職している、広報誌・紙の編集をしているといった会員を物色することになる。私の前の『山岳』編集担当だった大森久雄氏、後述する小倉厚氏や私がそのようなケースだった。編集経験といっても、経験した者からすれば、何でもできるという訳ではない。一口に編集と言っても書籍、雑誌、新聞で異なるし、新聞でも日刊、週間でまったく異なるのである。日刊紙の新聞社では、分業が確立していて取材・整理・校正をそれぞれ専門にやるから、取材記者は整理（編集）を知らない。山岳会では、それを十把ひとからげに「編集経験者」と見做すのであるから恐ろしい。私は農業関係専門紙、後には農業団体広報紙をやり、新聞編集はやってきたが、『山岳』のような雑誌形式の編集経験はなかったから、戸惑うのは当然である。

私が役員に選任された総会が終わって散会になったとき、望月さんが田口二郎氏（副会長、名誉会員）に引き合わせてくれた。「こんどの『山岳』に榎（有恒）さんのことを書きたい」という。それは有り難いが、『山岳』の編集者は、数々の武勇伝を持つこのような人を相手にしなければならないのかと、気が重かった。数日して、職場に谷口現吉氏（慶応 OB、名誉会員）から電話が来た。わざわざ「日本山岳会の谷口」というものだから、受話器を取った者はびっくりして、大きな声で「日本山岳会から電話」と取り次いだので、何事かと事務所中の目がこちらに向いた。谷口氏の用件は「三田（幸夫）さんの追悼文を書きたいので、字数や締め切り日を知りたい」というものだった。「よろしければそちらへ伺ってお話したい」と答えておいて、有楽町の事務所へ参上した。余談ながら、小島烏水についての面白い話がある。英国大使館の公用車が横浜正金銀行の玄関に横付けされたので、驚いて役員が出て行くと、先方は“Mr.Kojima”と言ったので、二度びっくり。本国のウェストンからの依頼で小島烏水を訪ねて来たのだが、銀行ではヒラ行員の小島久太がそんな大人物だとは誰も知らなかったのである。私の場合はそんな大げさな話ではないが、「あいつは何をやっているのだろう」と、勤務先で好奇の目で見られるようになった。

会の伝統が凝縮されている『山岳』

『山岳』の編集が私には重すぎる荷物であることは、織内さんも松田さんも承知していて、「何でも応援するから」との言質をもらった。それをよいことに、その都度、「聞くは一時の恥、聞かぬは末代の恥」と割切って、質問をぶつけた。世界の山、日本の山、その地理的概況と登山史・登攀史、会の歴史と現状、そしてどのような会員がいて、誰がどのような山登りをしてきたか（誰がどのような山の情報を持っているか）。知っておかなければならないことは山ほどあった。

最も心配だったのは、無名の編集者の原稿依頼に応じてくれるのか、原稿料を払わないのに原稿を書いてくれるのかということだったが、それは杞憂に終わった。海外登山の報告は、自分たちがやったことの記録であり、『山岳』に載せてくれるのなら名誉だと言わんばかりに書いてくれた。山の研究に関する論考も、発表の場として『山岳』を認めてくれていた。書評欄や追悼欄は、編集者が評すべき本を選び、追悼すべき人を選んで、これはという会員に執筆を依頼するのであるが、それもほぼ 100 名の会員が応えてくれた。その当時で 90 年の会の伝統と、それが作り上げてきた『山岳』への信頼である。それは嬉しいことだった。会の「歴史と伝統」といわれるが、それは、会に 10 年くらい係わった程度では見えて来ない。前の世代から引き継ぎながら、次の世代が作りあげてきたものであるから、目に見えない形で会員の中に流れている。『山岳』には、それが活字という形で凝縮されているということができるが、それを読み解くのは一朝一夕ではできない。

新・旧枝折峠と氷雪小屋

吉田 理一

日本山岳会は 2025 年の創立 120 周年記念事業として「日本の山岳古道 120 選」を企画していて越後支部にも推薦依頼が届いている。越後支部では 2020 年 12 月 12 日新潟市の新潟東映ホテルの拡大役員会において「越後・山岳古道調査プロジェクトチーム」を立ち上げ行動を開始した。

越後支部は上越・中越・下越・佐渡・会津の 5 地区に担当者を決めて調査を実施する事になった。私は中越地区担当リーダーを仰せつかった。中越地区は上越新幹線の停車駅では越後湯沢・浦佐・長岡・燕三条駅の周辺である。日本海側と太平洋側を隔てる脊梁山脈を挟んで群馬県・福島県との県境には数多くの山岳古道が存在し本部 PT にどれを推薦するか大変迷うところである。具体的には三国峠・蓬峠・謙信ゆかりの道・清水峠・枝折峠・六十里越・八十里越などである。

2021 年 3 月 21 日新潟市万代市民会館で各地区リーダーによるプレゼンテーションが実施され、中越地区からは私が八十里越と枝折峠の 2 本をパワーポイントを利用して解説した。協議の結果、八十里越を越後支部推薦 5 本のうちの 1 本とし、枝折峠は私個人の推薦として本部 PT に報告することとなった。

越後支部は 2026 年創立 80 周年を迎える。本部の古道調査を機に支部独自の 80 周年記念事業として「越後の山岳古道〇〇選」を調査研究して、支部機関誌「越後山岳第 14 号」や支部 HP に発表することになった。この調査活動はふるさと越後の再発見でもあり、支部会員にとどまらず各地の郷土史研究者・土地の古老等にも協力を仰ぎ、支部活動の活性化と新入会員の獲得の機会としても期待されるものである。

私が担当した枝折峠について調査研究した記録を次にまとめてみた。

平安時代末期の 1163（長寛元）年、尾瀬三郎房利は平清盛と皇妃をめぐり争い敗れ京を追われ、魚沼の地に流れ着いた。さらに深山に分け入ったところ道に迷った。そこに一人の童子が現れ枝を折って道の方角を教えてくれた。枝折峠の名はこの時の「枝を折る」に由来されていると言われている。

今から約 380 年前の 1641（寛永 18）年に只見川で銀の鉱石が発見され、無人だった原野に空前のシルバーラッシュが始まった。この銀山で採掘された銀は江戸の銀座に運ばれ徳川幕府の財政を支えた。しかし採算の取れる鉱脈を掘りつくし 2 世紀以上の鉱山の歴史に幕を閉じた。

銀山閉山後の銀山街道は利用されることは少なくなった。戦後銀山街道の 1 キロメートル北側に別ルートの自動車道路が開通してからは廃道と化していたが、昭和 60 年湯之谷村老人クラブが刈り払いを行い「銀の道」として復活し、トレッキングコースとして活用されるようになった。



新枝折峠の駐車場

平成 26 年 10 月 5 日越後支部は公募登山として「銀の道トレッキング」を実施した。私もネイチャーガイドとして参加させていただいたが、約 40 名の参加者があり盛況だった。

1948（昭和 23）年、枝折峠の北に前出の自動車道路が開通して路線バスが走るようになった。こ

の自動車道路の乗越は無名の峠であったので開通当初は「銀山峠」と呼ばれていた。後に国道 352 号線として国道に昇格し、峠のバス停も「枝折峠」となり当初は銀山街道の峠を「旧枝折峠」、自動車道路の峠を「新枝折峠」と区別して呼んでいた。現在は新旧の区別は無くなり、旧枝折峠は峠に枝折大明神を祀った祠があることから「明神峠」と呼ばれている。

越後支部初代支部長藤島玄編「越後三山・只見集成図」が 1963（昭和 38）年、富士波出版社から刊行された。この地図の裏面には藤島氏が足で歩いた貴重なコースガイドが紹介されている。

「枝折峠～小倉山～越後駒ヶ岳」の項にはバスで枝折峠の「氷雪小屋前」下車とあるが、集成図上には氷雪小屋の記載が無く、他の文献にも氷雪小屋の記述は極めて少ない。

「越後三山・只見集成図」平成 12 年版では「枝折峠の氷雪小屋前で下車」の文言は削除されている。氷雪小屋は何時まで存在していたかは不明である。

氷雪小屋についての記録は貴重な記録であるのでここに紹介しておきたい。

- ① 深田久弥著「日本百名山」（昭和 39 年 新潮社刊）の魚沼駒ヶ岳の項に次のように記載されている。これは昭和 37 年 11 月の登山記録である。

『十一月初旬、私たちはバスの通じる新しい枝折峠上の、電力中央研究所の氷雪害試験所で一夜の厄介になり、翌日小倉山を経て駒ヶ岳へ登った』

- ② 小出郷山岳史（平成 21 年小出郷山岳協会編集発行）

『昭和 30 年代には新枝折峠のバス停駒ヶ岳の登山道を登り始めた辺りに、送電線が張られた鉄塔が三基あった。どうしてこんな所に送電線があるのか、しかも前後が無い鉄塔と送電線は不思議な光景だった。この尻切れトンボの送電線こそ、送電線雪害研究所の実験施設で、電源開発と電力中央研究所（九電力会社により組織）が、送電線を雪害から守る研究をしていたのであった。』

枝折峠は標高 1065m、日本海まで遮る山は無くシベリア大陸からの暴風雪が直撃し過酷な厳冬期に耐えうる鉄塔・電線の研究開発には絶好の条件の適地であった。（資料・写真は小出郷山岳史から、写真をよく観察すると鉄塔には研究員が登っている様子が写っている）



送電線雪害研究所

- ③ みちぐさハイキングクラブの会報

地元の山の会の会報で、電子版のため発行時期が定かではないが、それによれば、この研究施設の調理人は地元湯之谷村の人が雇用されていた。厳冬期に奥只見ダム建設のための資材運搬専用道路（現在のシルバーライン）の途中から出て、物資補給のためこの施設へ行った時の模様を語った記録が載っているのを読んだことがある。「南極越冬隊の昭和基地を彷彿させるようだった」と記されている。

山岳古道の調査に関連して多くの未知の分野が広がってきた。

地元で眠っている貴重な資料を掘り起こし記録として残したいと思っている。

（写真提供：吉田理一）

～～《予告など》～～

5月山行「高尾山八十八大師巡りーその2 結願」

三度目の正直で9月に実行できた八十八大師巡りでしたが、回り切れなかった七十六番以降八十七番までを巡り、薬王院で巡拝証を受けます。これも延期に次ぐ延期ですが決着をつけたいと思います。琵琶滝・蛇滝の巡拝印の押されたパンフレットを忘れずご持参ください。もちろん、前回参加できなかった方もご参加いただけます。



期 日:2021年5月13日(木)

集 合:JR 高尾駅北口に9時

コース:高尾駅北口→落合→金毘羅台→1号路→薬王院→高尾山頂→3号路・1号路で下山
ケーブルでの下山もできます。歩行時間:休憩込み約5時間

担 当:CL 荒井正人 SL 小林敏博

申 込:5月9日(日)までに荒井へ

6月山行 八重山～能岳

標高 531m の八重山は、「見る・聞く・嗅ぐ・触る・味わう」の「五感の森」として地元の中학생らによって整備され、見事な展望が開けています。今回は八重山の頂を踏んだ後、その先にある能岳まで足を伸ばします。

期 日:2021年6月17日(木)

集 合:JR上野原駅改札口に9時20分

〔高尾駅発8時46分に乗車すると、9時3分に上野原駅に着きます〕

コース:上野原駅(バス)⇒大堀⇒上野原中学校⇒展望台⇒八重山⇒能岳(北コース)
⇒車道出合⇒新井(バス)⇒上野原駅北口 歩行時間:約3時間

担 当:CL 小林敏博 SL 渡邊貞信

申 込:6月13日(日)までに小林へ

7月暑気払い:7月17日(土)午後に予定。 コロナの影響により実施の可否は6月の会報にて。

会員異動

・新入会員:相良泰子(15553)

・退会:宮澤美渚子(10211) 尾野益大(13305)

※会費振込先(年会費1500円)

・ゆうちょ銀行からの振り込み 10000-18539041 「リョクソウカイ」

・他の金融機関からの振り込み 008-1853904 「リョクソウカイ」

※他の金融機関からの場合「支店名」は「ゼロゼロハチ」と入力してください。

--- 編集後記 ---

東京都、大阪府などで緊急事態宣言が発出され、コロナの状況は昨年同時期と何も変わっていません。ワクチン接種も遅々とした進みです。そのような中でしたが、4月18日は深田久弥没後50年の深田祭で茅ヶ岳に登りました。その前日に深田森太郎さんの記念講演がありましたので、お話を聴いてきました。碑前祭後の記念登山では大勢のファンが登りましたが、山頂はアラレが舞うような強風で、コロナのリスクは無かったと思います。行き帰りに注意すれば、体力維持・ストレス発散など、山歩きはコロナ禍にこそ適した良い趣味と言えるのではないかと考えているところです。5月山行は宣言の期限後となり何とか実施したいと思います。

次号予告<6月25日発行の主な内容>皆様からの近況・投稿をお待ちしています。

5月・6月山行報告 「続・古道調査の現状」 南川さん「編集者余話(その2)」他